第14章　「これが都鳥だ。」の「が」は格助詞か？

【辞論Ⅰ，格助詞・係助詞】

キーワード：古典語文法・現代語文法，格助詞・係助詞，動詞文・形容詞文・形容動詞文・存在詞文・名詞文，現象文・転位文，提題・対比・強調

1.「これなむ都鳥」の「なむ」と「これが都鳥だ。」の「が」について＝古典語文法と現代語文法の不整合性＝

『伊勢物語』九段「東下り」の最終節は次のようになっている。

京には見えぬ鳥なれば，みな人見しらず。渡守に問ひければ，

「これなむ都鳥」

といふを聞きて，

名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ，船こぞりて泣きにけり。

下線を施した「なむ」は係助詞であることは疑いようがない。ところで，「これなむ都鳥」を現代語に訳してみると，「これが都鳥だ。」ということになろう。この現代語訳に現れる助詞「が」は，常識的には格助詞とされるが，果たして本当に格助詞なのであろうか。文構造を全く等しくしていながら，一方が係助詞で，一方が格助詞という扱いは正しいのであろうか。

筆者は，「これが都鳥だ。」のような文，いわゆる名詞文に現れる「が」は係助詞と考える。そうみなすことが，古典語文法と現代語文法の不整合性を糺すことにつながると考えるからである。以下，そう考える理由について述べることにする。

2. 格助詞ガと係助詞ハの研究史

日本語の代表的助詞「ハ」と「ガ」（以下，係助詞「は」及び格助詞「が」を表す場合，用例以外では「ハ」「ガ」のようにカタカナ表記にする。）について，「鳥は飛ぶ。」の「は」は係助詞，「鳥が飛ぶ」の「が」は格助詞と明快に峻別したのは山田孝雄（やまだよしお）であった。

格助詞として定位された「が」について，対象語格としての用法を認めたのは時枝誠記（ときえだもとき）である。以後，国語学界は，これらを前提として学説を展開させてきたのであるが，ガに限定していえば，松村明（まつむらあきら）・三上章（みかみあきら）・大野晋（おおのすすむ）・久野暲（くのすすむ）・寺村秀夫（てらむらひでお）らの優れた業績はあるものの，山田・時枝が切り開いた地平を一歩も押し進めることなく，うち過ごされてきていると判断される。

日本語の文を述語の中核となる語の品詞によって分類すると次のようになる。

A	鳥が	飛ぶ。	（動詞文）
B	鳥が	恋しい。	（形容詞文）
C	鳥が	好きだ。	（形容動詞文）
D	鳥が	いる。	（存在詞文）
E	鳥が	ペットだ。	（名詞文）

これらのうち，山田はAの動詞文を主たる考察対象として，ガとハの相違を考察し，右に述べたような結論に達している。

また，時枝誠記は，B及びCの形容詞文・形容動詞文を主たる考察対象として，格助詞「を」に置き換えうる「が」を対象格を表す「が」と名付け，主格を表す「が」と区別する説を立てている。

単純化して要点だけを述べれば，主たる考察対象の文種をどれにするかによって，助詞「が」の性質が明確化されてきたのである。とすると，名詞文を主たる考察対象とすれば，「が」の新たな側面がみえてくるに違いない。

ところで，Eの名詞文については，「鳥はペットだ。」などとの比較考察を中心とした松下大三郎（まつしただいざぶろう）の学説，いわゆるハとガの相違を考察する談話分析的意味考察や旧情報・新情報を論ずる情報論的考察に終始し，文法的考察は十分自覚的にはなされていない。

具体的に言えば，松村明らの「初出のガ」（談話分析的研究），「不定詞と

ガ・ハ」「従属節のガ」（純粋文法的研究）や大野晋の「旧情報のハ」「新情報のガ」の説，久野暲の「総記」と「中立叙述」とにガを二分する説などがある。しかし，これらは，どちらかと言えば談話分析的意味研究であり，一文内部での「が」の機能を考察するという純粋に文法的な研究とはなっていない。

松下の学説は，ハとガという語の問題から，「有題文」と「無題文」とに二分する文の分類の問題へと発展するのであるが，ハとガの相違という面に主眼が置かれ，類似点には全く言及していないことが惜しまれる。

本章の目的は，これまで，動詞文・形容詞文・形容動詞文・存在詞文のガと同一のものとみなされて，吟味されることがなかった名詞文の「が」を主たる考察対象として，一文内部での機能がどのようなものであるのかを明らかにし，「が」には，主格助詞・対象格助詞のほかに係助詞としての機能があることを述べることにある。

実は，このような主張を，拙著『日本語はどんな言語か』（ちくま新書，1994年10月初版）・『現代日本語文法入門』（ちくま学芸文庫，1997年6月初版）ですでに公にしているのであるが，これらの書物を書いた段階では，名詞文の「が」を「副助詞」とするか「係助詞」とするか迷った末，「副助詞」としている。本稿において，「係助詞」と改めたことをおことわりしておく。

3. 格助詞の定義などについて

まず，格助詞について，学界の通説と考えられている説・定義などを検討することから始める。

a『国語学大辞典』（1980年9月，青木伶子（あおきれいこ））

体言または体言に準ずるものに付いて，それが文中の他の語に対して如何なる関係に立つかを純粋に示す助詞である（純粋に，とはそれ以下でもそれ以上でもない，の意）が，既に格助詞的機能を有する語に下接して，その機能を確認明確化することもある。（二重下線は筆者，以下同じ）

b『国語学研究事典』（1977年11月，青木伶子）

体言または体言に準ずるものに付いて，それが文中の他の語に対して如何なる関係に立つかを示す助詞であると言われるが，これを構文論的観点か

ら表現するならば，活用がないために文において展叙機能を与える助詞，と言うことができる。

c『日本語教育事典』（1982年5月，仁田義雄（にったよしお））

体言，及び，体言に準ずる語詞に付いて，それに文の構成へと働くシンタグマチックな関係を付与する。これは，大きく用言（名詞述語をも含む）に係っていくところの連用格助詞と，体言類に係っていくところの連体格助詞（準副体助詞とも）に別れる。

d『日本文法大辞典』（1971年10月，山口明穂（やまぐちあきほ））

助詞の一類。体言または体言に準ずる語につき，それが文の成分としてどのような働きをするか，また，文中の他の語に対して，どのような関係に立つかを示す助詞。たとえば，「魚　食べる」という語句において，「魚」の下に「が」がはいるか「を」がはいるかによって，「魚」の語の「食べる」に対する関係が全くかわってしまう。言い換えれば，「が」や「を」によって，「魚」の「食べる」に対する関係が決定されるのである。このような機能を果たすのが格助詞である。

aとbは青木伶子のものである。「文中の他の語」の中に名詞文の名詞述語が含められるのか否かは不明である。示された例文は，「の」の例を除くと，動詞文か形容詞文であり，名詞文の例はない。

また，bにある「展叙機能を与える助詞」という把握方法は，格助詞が事柄構成に関係する助詞ということを意味する。このことから考えると青木は名詞文の「が」を念頭に置いていなかったように見受けられる。

なお，青木は『現代語助詞「は」の構文的研究』，「格助詞の範囲―「目標格」をめぐって―」（『成蹊人文研究』2号）などにおいて，「の」を格助詞から除き，いわゆる連用格助詞に限定し，格助詞は，体言と用言との意味的関係を示すものという扱いをしている。

cは仁田義雄の文章である。二重下線部で明示されているように，仁田は名詞文の「が」を格助詞と認定している。

（　）を付して注記のようにしている。このような表現をした真意はわからないが，あるいは，名詞述語であるから，連体用法なのではないかという，品

詞論的観点からの質問に対する先取り的回答を行ったものだろうか。曖昧ではあるが，この部分があるため，筆者の問いかけに最も明快に答えてくれているのはcということになる。

ところで仁田は「日本語の格を求めて」（『日本語の格をめぐって』）において，「格」について詳細に考察している。

> 動詞にあらかじめ自らの生起を指定されている名詞句の，動詞ならびに他の名詞句に対する類的な関係的意味のあり方（同書，2頁）

これが仁田の「格」に関する考えである。とすると，cのように書きながらも，格助詞の中心は連用格助詞であると考えていると推測される。

確かに，「鳥が飛ぶ。」「鳥がいる。」の「飛ぶ」や「いる」には，「自らの生起を指定されている名詞句」すなわち，主格「鳥が」が存在する。また，「飛ぶ」場所や「いる」場所に関する場所格も「指定されている名詞句」と判断される。

しかし，「これが都鳥だ。」の「都鳥」には「自らの生起を指定されている名詞句」はあるのだろうか。名詞は連体修飾の働きかけを受け取るレセプターはあるが，連用格助詞による連用修飾の働きかけを受け取るレセプターは保有していない。とすると，「が」は，「都鳥」という名詞に関係するものではなく，「だ」に関係するものと判断するほかない。「だ」は陳述が置かれるところのものであるから，「が」は陳述に関係するものと判断される。

こう考えると，cの（名詞述語文を含む）という表現がどのような含みのもとになされたのか，にわかに曖昧になってしまう。

なお，右の論考の例文はすべて動詞文であり，名詞文の例はない。

dは山口明穂の文章である。「たとえば」以下の具体例による説明で，「どのような関係」という表現の意味限定が行われ，理解しやすい。残念なことに，「文中の他の語」の中に名詞文の名詞述語が含まれるか否かは不明である。示された例は，青木のものと同様であり，名詞文の「が」については念頭に置かれていなかったものと思われる。

ただし，山口は近著『日本語を考える＝移り変わる言葉の機構＝』において，

この千鶴子さんはね君，ピエール氏が非常に好きだったんだよ。

電話は昼が安い。

などの「が」を「主格」「主語格」とすることに疑いを抱き，江戸時代の学者，富士谷成章（ふじたになりあきら）の説，

「何が」は，その受けたる事に物実（ものざね）をあらせて，それがと指す言葉なり

（『あゆひ抄』「乃家」）

に賛意を示し，「物実」の観点から，問題点を考察している。

成章は，「が」を「乃家」の項目で論じているので，格助詞の類と考えているようであるが，説明から判断すると，あるいは，上接語を強調する強めの副助詞と認定していたかとも疑われる。山口はこのことについて明確に記述していないので不明とするほかないが，山口が，通常格助詞ガとされている「が」に対して，すべてを「主格」「主語格」とすることに疑問の目を向けていることだけは確実である。山口のガに関する考えは変化したと考えられる。

以上をまとめると，「これが都鳥だ。」の「が」を格助詞と認定するのかしないのかについて，権威ある辞典・事典に尋ねても確実な答えは得られないという結論になる。

4. ガの用法について

次にガは，これまでどのようなものとして記述されていたかについて検討しておく。

e『日本文法大辞典』（前掲，阪田雪子（さかたゆきこ））

① 主格助詞として用いられ，その動作・作用を行う主体，またその性質・状態を有する主体を表わす。

バスが来ましたよ／木々の緑がひときわ美しくなった／あそこにだれがいるの／電話がかかってきたら，知らせてください／庭の桜が美しい／ここまでが私の担当範囲です

名詞文の「が」を主格助詞と認定していることが，右の二重下線を付した例文により明らかである。

ところで，「ここまでが」という表現は，「私の範囲」という性質・状態を有

する主体を表すものなのだろうか。すなおに考えれば，この例文は，「ここまで」＝「私の範囲」という同定判断を示した判断文であるように考えられる。言い換えると，この表現は，「ここまでは私の範囲です」というハを用いた文と事実関係においては等価のものと考えた方が自然であろう。二重下線部の用例を「主格助詞」の用例に加えることには違和感を覚える。

f『基礎日本語辞典』(1989年6月，森田良行(もりたよしゆき))

名詞や，「用言＋の／こと／もの／はず」「用言＋だけ／ばかり／ぐらい」などの形に付いて，主格を表す。「が」が付くことによって，それらの語句は，述語の表す内容の動作主・作用主・属性主・対象などを表すわけである。主語「何が」を受ける述部は「何だ／どんなだ／何する」等であるが，「AがCだ／AがCする」文型をとってAがCの動作・作用・状態の主体となるばかりでなく，「AはBがCだ」の形で，Bを状態Cの対象語として設定する言い方も見られる。B—C関係の在り方は文の発想とかかわりを持っており，次の二類に分けられる。(中略)

「あの人は山田さんです／あの人が山田さんです」

前者のハ文型は，「あの人」が了解済みの話題であり発想の出発点であって，表現意図は回答部「山田さんです」の提示にある。一方，ガ文型は，そのまったく逆の発想に立ち，「山田さん」が共通話題で発想の出発点となる。表現意図は回答部「あの人が」にある。発想の手順は思考の流れに逆行するわけであり，ハ文型（判断文）「あの人は—山田さんです」(課題／回答)の倒置形式「あの人が—山田さんです」(課題／回答)の関係を持つところから転位文と呼ばれている。

森田良行も名詞文の「が」を主格助詞と判断しているのであろうことは，二重下線部「何だ」及び「AがCだ」によって明瞭である。

森田は「が」による文を「現象文」と「転位文」に二分する。前者は本章の動詞文・存在詞文のことである。後者が本章で問題としている名詞文であり，森田は「あの人が山田さんです」を例文として考察を展開している。

文意に則して解釈すれば，「あの人」＝状態の主体，「山田さんです」＝状態

ということになろう。果たして，固有名詞で「状態」を表せるものなのであろうか。結果的には，「山田さん＝健康だ／賢い／明るい」などの状態を示しうるのであるが，それは意味的含みであって，文法レベルで考えれば，固有名詞がある「状態」を表すと考えることには無理がある。

ところで，「(中略)」以降で展開される議論は，「あの人が山田さんです。」と「あの人は山田さんです。」との相違，発想が逆であることに関するものであり，談話分析的意味考察と判断されるものである。「が」が通常格助詞とされ，直前の文脈において，森田もそのようなものと把握しているのであるが，「転位文」の説明においては，そのことを完全に忘れている。談話分析的意味のレベルでは森田の記述の通りだとして，文法のレベルではどうなのであろうか。

「あの人は山田さんです。」は判断文である。とすると，発想を逆にした「あの人が山田さんです。」は「転位判断文」になるのではなかろうか。「回答」部を前置するという操作は「回答」部を取り立てる操作と考えることができる。取り立てる機能は係助詞の機能である。

判断文　あの人は（係助詞）—山田さんです。　　転位文　あの人が（格助詞）—山田さんです。

森田説を明示化すれば，右のようになる。不整合であることは一目瞭然である。筆者は名詞文の「が」を係助詞と判断すれば，この不整合性が排除されると考える。

前節では，名詞文の「が」が格助詞と認定されるのか否かがはっきりしなかったのであるが，本節での紹介により，名詞文の「が」も主格助詞と認定されていることが明白となった。また，著者が加えたコメントにより，名詞文の「が」を「主格助詞」と認定することは極めて危ういことで，むしろ係助詞と考えた方が実態に則したものだということが理解されたことと思う。

5. 古典語からのアプローチ＝「これなむ都鳥」という名詞文＝

佐伯梅友（さえきうめとも）は『古文読解のための文法』において，古今和歌集にある「見渡せば，柳桜をこきまぜて，都ぞ，春の錦なりける。(古今集，春上，56)」を取り上げ，「都ぞ春の錦なりける」に言及して，次のように述べている。

都ぞ，春の錦なりける。

は，都が春の錦であることに気が付いた気持ちの表現で，紅葉の美しさを秋の錦と見るのは一般のことだが，春の錦なんてあるのかないのか，と思っているとき，都の美しい眺めに接して，春の錦はこれだ，都が春の錦だったよ，という気持ちで，この歌は詠まれたのだと解さなければならない，と私は思うのです。

「ぞ」は言うまでもなく係助詞である。そして，この「ぞ」に相当するものとして，本章で問題としている，名詞文の「が」があてられているのである。

国語史的に言えば，「ぞ・なむ・や・か・こそ」などの係助詞は古典語には存在するが，近代語には存在しない。これらは，終助詞化するか，副助詞化するか，あるいは消滅してしまうかしてしまい，現代語の係助詞は「は／も」の二種というのが学界の定説である。とすると，「都ぞ春の錦なりける」は「都は春の錦だったよ。」と訳されるはずであるが，そうではないというのが佐伯の主張するところである。筆者は，佐伯の説をよしとし，名詞文の「が」は「ぞ・なむ・や・か」などの後進とみなす。とすれば，名詞文の「が」は係助詞ということがすんなり納得できよう。

佐伯にならい，係助詞を受けて名詞で終わる古文を対象にし，それらがどう現代語訳されているか確認してみよう。なお，現代語訳は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。

① 谷風にとくる氷のひまごとに打ちいづる波や春の初花

（古今・春上・12）

……流れ出てくる波　それが春の初花なのかしら。

② 渡守に問ひければ，「これなむ都鳥」といふを聞きて

（伊勢・9・東下り）

……船頭に尋ねると，「これが都鳥じゃ」と言うのを聞いて，

③ 難波津を今朝こそみつの浦ごとにこれやこの夜をうみ渡る船

（伊勢・66・みつの浦）

……これがまあ，海渡るもの，この世を憂み渡る人の姿にたとえられるものであろうか。

④＊うきふしを心ひとつに数へきてこや君が手を別るべきをり

（源氏・帚木）

……今度こそあなたとお別れしなければならないのでしょう。

⑤　見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむこや夜の人のまどふてふ闇

（源氏・紅葉賀）

……これが世の人の，子ゆえに迷うという親心の闇でございましょう。

⑥　風吹けば波の花さへいろ見えてこや名にたてる山ぶきの崎

（源氏・胡蝶）

……これがあの有名な山吹の崎ということになるのでしょうか。

⑦　朝夕になく音をたつる小野山は絶えぬなみだや音なしの滝

（源氏・夕霧）

……とめどもない私の涙が音無の滝となるのでしょうか。

⑧＊人はみな花に心をうつすらむひとりぞまどふ春の夜の闇

（源氏・竹河）

……このわたし一人だけが春の夜の闇に思い迷っている。

①，②，③，⑤，⑥，⑦の五例は「や／なむ／や／や／や／や」が「が」と訳されている。このほか，蝉丸の歌「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」（後撰・雑一・1089）の「や」も現代語にすれば，「これがまあ，……」となり，「が」に相当する例となる。

④，⑧の二例は「こそ／だけが」のように副助詞で訳されている。④は「今度が」とも訳せるところである。全集本の現代語訳は「や」の疑問の意を訳出していない。この部分は意訳しているのであろう。

⑧の「ひとり」は副詞的働きをし「ぞ」はその強めと考えると今問題としている例ではなく，除外するべき例であるかもしれない。

以上の検討により，現代語の「が」には，古典語の「や／なむ／ぞ」などの係助詞に対応するものがあるということが確認されたものと判断する。

6. 名詞文に用いられる「が」の特殊性

筆者は，本章で名詞文の「が」は係助詞と考えた方が整合性のある解釈ができると主張しているのであるが，「は」や「も」という係助詞と異なる点が全

くないわけではないことを最後に付加しておく。

係助詞の主要な用法は次の三種である。

a　吾輩は猫である。　（提題の用法＝題目語を示す）

b　姉は十六，妹は十五。　（対比の用法＝文の成分間の意味的対比を表す。主格に限定されない）

c　ちょっとは関心がある。（強調の用法＝副詞などの下に用いられ，その意を強調する）

名詞文の「が」には，右に述べたうち，提題の用法と対比の用法がある。言い換えると，a，bの「は」を「が」に置き換えることができるということである。

ただし，対比の用法について言えば，「は／も」に比較し，「が」の用法は狭い。

bの例は主格の例である。名詞文の「が」が対比の意で用いられる時は，主格の場合に限定され，「本は読まない。（対格）」「君にはやらない。（与格）」「明日の九時は学校です。（時格）」などの用法は存在しない。

適当な場所を探している場合，「ここはよくない。あそこがいい。」と表現することがある。この例は，対比の用法とみなされるが，「は」の対比と比べ，焦点性が一層強められているものと思われる。

また，「は／も」の係助詞は「が」「を」を除く他の格助詞に下接するが，名詞文の「が」にはこの用法もない。

ところで，「は／も」の用法のうち，aの提題の用法こそ係助詞の係性を表すものである。bの対比の用法やcの強調の用法は副助詞の機能とした方がふさわしい。名詞文の「が」はこの意味で純粋な係助詞ということになる。

7. 結　　論

名詞文の「が」，「これが都鳥だ。」の「が」は，係助詞「は／も」と性質を同じくする機能を有している。ただし，「は／も」が有する係助詞的用法（提題の用法）のみを共有し，副助詞的用法は有していない。また，「は／も」は「が／を」を除くほかの格助詞に下接するが，名詞文の「が」にはこういう用法もない。係助詞としては用法の幅がもっとも狭いものということになる。言

い換えると，名詞文の「が」は純粋な係助詞なのである。

■ 発展問題

(1) ガを用いたA系の文とハを用いたB系の文に関する問いに答えなさい。

A1 公園の桜が咲いた。　B1 公園の桜は咲いた。　［動詞文］
A2 公園の桜が美しい。　B2 公園の桜は美しい。　［形容詞文］
A3 公園の桜が好きだ。　B3 公園の桜は好きだ。　［形容動詞文］
A4 公園に桜がある。　B4 公園に桜はある。　［存在詞文］
A5 公園の桜が染井吉野（そめいよしの）だ。　B5 公園の桜は染井吉野だ。　［名詞文］

問1　A系とB系とを比較し，客観的事実の報告または説明になっている方をマークしなさい。

問2　A系でマークされなかったものはあるだろうか。あるとすれば，ほかのA系となぜ異なるのかについて考えなさい。

問3　B系でマークしたものはあるだろうか。あるとすれば，ほかのB系となぜ異なるのかについて考えなさい。

問4　マークされなかった文には，事実の報告または説明以外に，話し手・書き手の主観的判断が加味されている。どのような主観的判断が加味されているのだろうか。

問5　学校文法では，「公園の桜が」「公園の桜は」のどちらも，同じ「主語」としている。こういう扱いをどう考えるか。

(2) 各文のガとハの働きについて説明しなさい。

A1 ここに英語が書いてあります。　B1 ここに英語は書いてあります。
A2 君は英語が読めますか？　B2 君は英語は読めますか？
A3 私は英語が苦手（にがて）です。　B3 私は英語は苦手です。
A4 英語が読めるようになりたいです。　B4 英語は読めるようになりたいです。

(3) 助詞を分類するには，どのような方法があるか調べてみよう。

■ 参考文献

1) 山田孝雄『日本文法論』(宝文館出版，1908)
2) 山田孝雄『日本文法学概論』(宝文館出版，1936)
3) 時枝誠記『日本文法 口語篇』(岩波書店，1950)
4) 松村　明「主格表現における助詞『が』と『は』の問題」国語学振興会編『現代日本語の研究』(白水社，1942)
5) 三上　章『続・現代語法序説』(くろしお出版，1972)
6) 大野　晋『日本語の文法を考える』(岩波書店，1978)
7) 久野　暲『日本文法研究』(大修館書店，1973)
8) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』(くろしお出版，1991)
9) 松下大三郎『改撰標準日本文法』(勉誠社，1978)
10) 松下大三郎『増補校訂標準日本口語法』(勉誠社，1975)
11) 国語学会編『国語学大辞典』(東京堂出版，1980)
12) 佐藤喜代治編『国語学研究事典』(明治書院，1977)
13) 日本語教育学会編『日本語教育事典』(大修館書店，1982)
14) 松村　明編『日本文法大辞典』(明治書院，1971)
15) 青木伶子『現代語助詞「は」の構文的研究』(笠間書院，1992)
16) 青木伶子「格助詞の範囲―「目標格」をめぐって―」『成蹊人文研究』2号（成蹊大学，1994)
17) 仁田義雄編『日本語の格をめぐって』(くろしお出版，1993)
18) 山口明穂『日本語を考える＝移り変わる言葉の機構＝』(東京大学出版会，2002)
19) 森田良行『基礎日本語辞典』(角川書店，1989)
20) 佐伯梅友『古文読解のための文法』(三省堂，1988)
21) 野田尚史『「は」と「が」』(くろしお出版，1996)
22) 小池清治『日本語はどんな言語か』(筑摩書房，ちくま新書，1994)
23) 小池清治『現代日本語文法入門』(筑摩書房，ちくま学芸文庫，1997)

著者略歴

小池清治（こいけ せいじ）

（第1～9，14章担当）

1941年　東京都に生まれる
1971年　東京教育大学大学院博士課程単位取得退学
1971年　フェリス女学院大学専任講師
1976年　宇都宮大学教育学部助教授
現　在　宇都宮大学国際学部教授

赤羽根義章（あかば ねよしあき）

（第10～13，15章担当）

1958年　愛媛県に生まれる
1986年　宇都宮大学大学院修士課程修了
1992年　愛知教育大学専任講師
1996年　宇都宮大学教育学部助教授
現　在　宇都宮大学教育学部教授

シリーズ〈日本語探究法〉2

文法探究法

定価はカバーに表示

2002年10月1日　初版第1刷
2007年2月25日　　第3刷

著者　小池清治
　　赤羽根義章
発行者　朝倉邦造
発行所　株式会社朝倉書店
東京都新宿区新小川町6-29
郵便番号　162-8707
電話　03(3260)0141
FAX　03(3260)0180
http://www.asakura.co.jp

〈検印省略〉

© 2002〈無断複写・転載を禁ず〉

教文堂－渡辺製本

ISBN978-4-254-51502-2　C 3381

Printed in Japan